「底が突き抜けた」時代の歩き方 317

少しでも動けば爆発する地雷の上に横たわっている・・・・・・世界

── 映画『ノー・マンズ・ランド』

前号で『サラエボ旅行案内（サバイバル・ガイド）』（三修社刊）の企画・執筆グループ代表のスアダ・カピッチの発言と、戦火のサラエボでスーザン・ソンタグが演出、上演したサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』について書いたが、９１年、湾岸戦争、ソ連邦消滅という世界的な大事件の陰で勃発しつつあった旧ユーゴスラヴィアでの戦争について、ここで簡単に素描しておこうと思う。

ユーゴスラヴィアは終身大統領チトーのもとに六つの共和国で構成されていたが、８０年のチトーの死後、深刻な経済危機を背景に民族主義が台頭してくる。９１年６月、独立を宣言したスロヴェニアに対してユーゴ連邦軍は武力行使に出るが、わずか７日間で敗退してしまう。それはセルビア大統領のミロシェヴィッチが、スロヴェニアに利害関心を持っていなかったことにも因っている。スロヴェニアと時を同じくしてクロアチアも９１年に独立を宣言するが、クロアチアの全人口の１２％に当たるセルビア人が独立に反発して武装したために、内戦が激化する。９２年１月にＥＣがクロアチアの独立を承認するが、翌２月にセルビア人勢力は「クライナ・セルビア人共和国」を創設し、クロアチア領土の３分の１を支配する。そしてマケドニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが相次いで独立を宣言。９２年４月、セルビアの軍事的圧力の下、モンテネグロはセルビア中心の新ユーゴスラヴィア（ユーゴスラヴィア連邦共和国）に組み込まれていく。

問題は、ムスリム人（４４％）、セルビア人（３１％）、クロアチア人（１７％）の三民族が共存していたボスニアでの独立宣言であり、それがムスリム人とクロアチア人の主導下で行われ、セルビア人がボイコットしたために、９２年４月以降、内戦状態に陥ってしまう。セルビア人勢力によるイスラム教徒のムスリム人に対する強制収容、集団レイプなどによる民族浄化の嵐が吹き荒れ、９４年２月５日には首都サラエボの青空市場が砲撃され、死者６８人の大惨事となった。これを契機に空爆をちらつかせながらの国連による停戦交渉が一応の進展をみせ、２月１７日にはセルビア人勢力が重火器の撤去に合意するが、しかし、その後も殺戮・戦闘が完全になくなったわけではなかった。３月にムスリム人とクロアチア人で「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦」を樹立し、１２月１８日にはジミー・カーター米国元大統領が和平調停のためにサラエボ入りした。９５年８月に米軍中心のＮＡＴＯによるセルビア人勢力に対する本格的な空爆が開始され、米主導下でのムスリム・クロアチア人勢力５１％とセルビア人勢力４９％のボスニア分割による和平が模索された結果、１１月、アメリカのオハイオ州デイトンで三者の

間にボスニア和平合意書が仮調印、１２月、パリで本調印という経過を辿った。
　９２年３月のボスニアの独立宣言をきっかけとするムスリム、セルビア、クロアチアの三民族の領域拡大の戦争及び各国の介入について、映画パンフには次のように記されている。
《元来、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは異なる民族同士の結婚が珍しくなく、都市部では三民族の血が何代にも渡って混ざり合ってきた。それゆえ、各民族に別れて戦うということは、すなわち隣人殺し、兄弟殺しを意味していた。三民族の勢力がそれぞれの領域拡大を目指して「民族浄化」が行われる。これは、地域を支配するために、その地域に住んでいた民族を殺したり、追い出したりする「他民族撲滅」の別名である。この過程で、女性だけを集めた収容所を作るなど組織的にレイプが行われた。
　ボスニア紛争開始から数ヶ月間でセルビア人とクロアチア人勢力はあわせて全土の９割を支配。しかし、冷戦後最大の民族紛争に対して、ＥＵ、アメリカ、ロシアの足並みは揃わず、政治的解決と軍事的解決の間を揺れ続ける。国連は、直接的な介入をせずに、食糧や医薬品などを送り届けるという「人道援助」をするだけにとどまる。（中略）
　この泥沼紛争で、総人口の過半数の２００万人を超える難民と国内避難民、２０数万人の死者が出た。そして、数百万個と見られる地雷の撤去はあまり進んでいない。》
　以上の簡単な経過の中にスアダ・カピッチの次の発言（『ＳＡＰＩＯ』９５．１．２６－２．９）を付け加えると、大体の輪郭が描けるかもしれない。
「……クロアチアの領土の３分の１はセルビアに占領されたままです。ちなみに、クロアチアの一部であるイストリアにはイタリアが利害関心をもっており、イタリアのベルルスコーニ政権がファシズム的な色彩を帯びていることは周知のとおりです。
　さて、ボスニアでは９２年以来戦争が続いていますが、最大の問題は、そこで原則が覆されてしまったことです。ボスニアは独立の主権国家であるにもかかわらず、その主権は守られず、武器禁輸のために自らを守ることもできないというのですから。こうなれば、あとは何でもできるということになってしまうのです。
　ミロシェヴィッチは、ボスニアでやりたいことをやってしまったら、モンテネグロで同じことを繰り返すでしょう。モンテネグロはセルビアとは異質なのですが、軍事的圧力の下で、セルビアを中心とする新ユーゴスラヴィアに組み込まれています。その次はマケドニアでしょう。マケドニアには、セルビア人、モスレム人、アルバニア人、ギリシア人がいて、アルバニアやギリシア、そしてブルガリアも大きな利害関心をもっています。セルビアの一部であるコソヴォはアルバニアとの結びつきが強くて、前から紛争があったことはご存じでしょう。北に目を移せば、セルビアの別の地方であるヴォイヴォディナにはハンガリー人がいて、新ユーゴスラヴィアに組み込まれることを快く思っておらず、セルビアとハンガリーとの対立の火種になりかねません。要するに、この地域はメチャメチャだということです（笑）。どこで、いつ、どういう紛争が起こるかは予測できませんが、あと１０年くらいはさまざまな紛争が相次ぐことになるでしょう。

そして、その間、サラエボは人質にとられたままでしょう。」

さて、いよいよボスニア出身で３３歳のダニス・タノヴィッチ監督の映画『ノー・マンズ・ランド』について語ろうと思う。これまで旧ユーゴ内戦を描いた映画で、『アンダーグラウンド』（エミール・クストリッツァ監督）、『ウェルカム・トゥ・サラエボ』（マイケル・ウィンターボトム監督）、『パーフェクトサークル』（アデミル・ケノヴィッチ監督）、『ユリシーズの瞳』（テオ・アンゲロプロス監督）などを観てきているが、それらの映画と比較しても、『ノー・マンズ・ランド』はボスニア内戦の寓意性をシンプルに際立たせている作品であることは明白である。一体、何が問題であったのか、その問いを凝視しつづけるなかから生みだされてきた作品であることは間違いない。

映画の冒頭は、９３年ボスニア内戦の最中、深い霧が立ちこめる暗闇のなかでボスニア軍の１０人ほどの兵士たちが道に迷っているシーンから始まる。そう、この戦争ほど深い霧が立ちこめる暗闇のなかでたたかわれている戦争はなかったし、誰もが道に迷っていた。非常に秀逸で印象的な冒頭シーンである。疲れ果てて眠りこんでいた兵士たちが夜明けとともに目を覚ますと、セルビア軍が攻撃を仕掛けてきた。ボスニア軍の兵士たちはセルビア軍の陣地に迷い込んでいたのだが、このシーンもまた、ある朝目を覚ましたサラエボ市民たちがセルビア軍に包囲されていたという不条理な現実を暗示しているといえる。

銃弾の雨の中を逃げ回って、命からがら塹壕に辿りついたのは一人だけだった。その塹壕はセルビアとボスニア両軍に挟まれた中間地帯であり、どちらの陣地にも属さないが故に、誰でも攻撃対象となってしまうノー・マンズ・ランドであった。ここで朝鮮半島の南北の境界線となっている板門店の共同警備区域（ＪＳＡ）が連想されないだろうか。もちろん、戦闘地域での最前線となっているノー・マンズ・ランドと、ＪＳＡとは基本的にその性格が異なるとはいえ、南北の人間の接触が禁じられているが故に、唯一南北の人間の接触地点であることを浮き彫りにしてみせているＪＳＡと、どちらの陣地にも属さないが故に、セルビア兵とボスニア兵が鉢合わせしてしまう可能性を孕んでいるノー・マンズ・ランドは、禁忌（タブー）が集中している点で重なり合っている。

映画『ＪＳＡ』は、南北の人間の接触が禁じられているＪＳＡで南北の兵士が交流することになると、はたしてどのような事態（悲劇）が惹き起こされるかという点に照明を当てて描かれ、そこに同じ民族である南北の人間の親密な交流を禁じる分断政策は、南北双方の人間にどれほどの悲しみや辛さ、苦しさをもたらすものであるかをくっきりと浮かび上がらせていた。映画『ノー・マンズ・ランド』もまた、戦闘状態の中でもし敵同士が中間地帯で出会うことになってしまったら、一体どのようなことになるのか、という点に引き絞って展開されているようにみえる。

セルビア軍はボスニア兵の生存者を確認するために、古参と新米の二人の兵士を塹壕へ調べに行かせる。たった一人生き残ったボスニア兵チキは、塹壕の中にある小屋の奥に身を潜めて彼らを窺う。生存者がいないことを確認したセルビアの老兵士は、塹壕に

横たわっていたボスニア兵の死体の下にジャンプ型地雷を仕掛ける。遺体を収容しにやってくるボスニア兵を木っ端微塵にするためだ。新米のニノはそんな老兵の非情なやり方に唖然とする。小屋に近づいてくる二人の前にチキは飛び出して老兵を撃ち殺し、ニノにも怪我を負わせる。恐怖に戦(おのの)くニノを見てチキは銃を下ろす。チキが老兵を撃ち殺して新米のニノを見逃したのは、たまたまのようにみえるけれどもそうではない。チキは小屋から二人の様子をじっと窺いながら、仲間の死体の下に地雷を尚も仕掛けようとする老兵に救いがたさを感じ、殺意を募らせたにちがいない。おどおどしているニノは、敵になりきれていないものとしてチキの眼には映った筈だ。このシーンは、彼らの戦争が憎しみあわなければならない戦争とは異なる一瞥を投げかけていたように思われる。

塹壕の中でにらみ合うチキとニノ。二人とも自軍に援軍を求めたいが、塹壕からはどちらにも連絡方法がない。銃を手にするチキはニノに、服を脱いで塹壕の上で白旗を振るよう命令する。しかし、事態が飲み込めないセルビア軍は裸になったニノに気づかず、砲撃を撃ち込む。事態は暗礁に乗り上げる。やがて呻き声が聞こえてきて、死んだと思っていたチキの戦友ツェラが生きていることがわかり、チキとニノは慌てて駆け寄るが、少しでも動くと彼の下に埋められた地雷が爆発するので、身体を動かすことはできない。ますます身動きがとれなくなっていく三人だが、セルビアとボスニアのどちらが先に仕掛けたかと事ある毎に言い争っていたチキとニノはこの状況から抜け出すため、今度は二人が服を脱いで、塹壕の上からそれぞれの軍へ向け、懸命に白旗を振って助けを求める。

この光景を目撃した両軍はなすすべもなく、国連防護軍に助けを求める。応援の合図を送った後しばらく待とうとする二人は、静かに同じ言葉で語り合う。チキが自分の故郷のガールフレンドの話をすると、ニノがその娘と同級生であったことがわかり、二人はしだいに打ち解けていく。このシーンは、映画『ＪＳＡ』で南の兵士が北の兵士にアメリカの雑誌のヌードを見せると、北の兵士がさすがアメリカと無邪気に興奮したり、学生の合宿生活のような雰囲気を醸しだしているシーンと重なり合う。内戦前はボスニア人もセルビア人も一緒に暮らしていたのだから、チキとニノに共通の知人がいても別に不思議ではなかった。むしろいまこうして敵同士として争っていることのほうが不思議であったのだ。

連絡を受けた国連防護軍のマルシャン軍曹は〝もう傍観者はご免だ〟という気持ちから、上官命令を無視して戦車に乗って塹壕にやってくる。状況を聞いたマルシャン軍曹は、ツェラの体の下に横たわる地雷を撤去するために処理班を呼ぼうとするが、無線による上官の強い命令によって撤退を余儀なくされる。ニノが立ち去ろうとする国連防護軍に付いていこうとしたために、残った自分たちをセルビア軍が攻撃してくるのを恐れたチキはニノの足を撃ち、塹壕から離れないようにする。国連防護軍は去り、二人は再び元の一触即発の状態に戻っていく。隙あらば相手を狙おうとする二人を横目に、地雷の上に横たわるツェラは、「もうたくさんだ。泥沼なんだぜ」と悲しそうにいう。

ボスニア軍の検問所までマルシャン軍曹が戻ると、防護軍の無線を傍受してやってき

たテレビ局のレポーターのジェーンがカメラマンを従え、マイクを向けてくる。現地での決定権を持たず、事態に動こうとしない上官に腹を立てているマルシャン軍曹は、ジェーンに塹壕の取材を約束しながら、マスコミを使って国連防護軍を動かすことに成功する。マルシャン軍曹の報告も聞き流し、秘書との情事に精を出していた司令官もマスコミが聞きつけてきたために、渋々秘書を連れてヘリコプターで現地に駆け付ける。塹壕の手前の広場に集まっている国連上層部の幹部や各社のマスコミ連中。塹壕の中ではマルシャン軍曹と地雷処理班の兵士がツェラの体の下の地雷を撤去しようとするが、撤去不可能の判断が下される。

地雷撤去のために全員が塹壕からの退去を命じられた際、足を撃たれたことに恨みを抱くニノは隠し持っていたナイフでチキを襲い、騒ぎを惹き起こす。塹壕の二人に話を聞くスクープを手に入れようとするジェーンに、「俺たちの悲劇はそんなに儲かるのか」とチキは噛み付く。塹壕から連れ出されたチキとニノは別々に国連防護軍の監視下に置かれるが、隙を見てチキはニノめがけて発砲し、そのチキも突然の事態に取り乱した国連防護軍の兵士によって撃ち殺されてしまう。ジェーンは、カメラマンにそのシーンを「撮った？」と確認する。司令官は「ご覧の通り、状況は非常に困難だ。残りの兵士に全力を傾け、一人でも命を助けたい」と記者たちに話し、全員の現場からの退去を促す。

国連防護軍も記者たちも引き揚げようとする中で、地雷の信管を外したと聞かされていたマルシャン軍曹は塹壕を覗き込み、前と同じ状態でツェラが横たわっているのを見る。彼をどうするのかと軍曹は上官の大尉に訊く。大尉は「名案があれば聞かせろ」と答える。「置き去りに？」という軍曹に大尉は、「では、どうしろと？　解決策は？　専門家が言うんだ。あきらめろ。我々の管轄外だ」と言い聞かせる。そんな軍曹に司令官も「君の気持ちは分かる。だが君が尽くしても ── 何も変わらん。行こう」と声を掛ける。去り際にジェーンは軍曹にレポートが出来たことの礼をいい、塹壕は撮らないのかと訊くカメラマンに、「ええ。何もない、ただの塹壕よ」と応え、装甲車もマスコミの車の群れもすべて走り去って行く。塹壕の中で地雷を背に一人横たわるツェラが俯瞰でバックしていく画面として映しだされ、映像は閉じられる。

この映画は今年のアカデミー賞で外国語映画賞を受賞し、カンヌ映画祭でも脚本賞を受賞し、他にもゴールデングローブ賞外国語映画賞やセザール賞最優秀新人監督賞など２０もの各地での賞を受賞している。それは当然と思われるが、仏英を中心にスペイン、イタリアなどのヨーロッパ諸国で構成された国連防護軍が映画の中でもみられたように、住民を救う素振りをみせながら何の援助もせず、結局のところ人道援助物資を守る部隊にすぎなくなってしまったことを考えると、各地での賞を受賞することよりも、このような映画を作り出さずに済まされたであろう内戦の早期解決に向けての国際社会の真剣な努力こそが最大の賞に値しただろうに、と思ってしまう。タノヴィッチ監督も本当はそのことのほうを切に望んでいたにちがいなかっただろう。

監督自身、映画パンフのインタビューで、「ボスニア人の身に起こったこの紛争は、

ベケットの戯曲の表題に要約できるような気がします。『ゴドーを待ちながら』 ── 我々は本当にゴドーを待っていました。紛争の間、待つのをやめたことは一瞬たりともありませんでした。そして、やっと彼が来てくれたと思ったとき、僕らの希望は幻想にすぎず、結局誰も来ないのだと知ったのです……国連の介入は、彼ら自身の面目を保つためであり、我々を救うためではありませんでした。」と語っているように、この映画もまた、いくつかの点で、『ゴドー』そのものであるといえる。それは、敵同士のボスニア兵とセルビア兵の中間地帯での出会い、対話劇の展開、更に、目覚めると自分の体の下には地雷が仕掛けられているという、笑うに笑えぬ、泣くに泣けぬ不条理、だが何といっても塹壕にいる三人とも遂にやっては来ない『ゴドー』を待ち続けている、待ち続けるしか術はない場所に置かれている点である。

このノー・マンズ・ランドの塹壕の中に、ボスニア内戦のすべての問題が集約されている、というように映画はつくられている。「お前らは無法の限りだ。略奪に殺りくに強姦。俺の村も焼き討ちされた」とボスニア兵のチキがいうと、セルビア兵のニノは「そんな光景は見たことない。僕の村はどうだ。誰が村人を殺した」とやり返す。二人の争いはどっちもどっちで、子供の争いのようにみえて滑稽に感じるけれども、ボスニア兵の死体の下に地雷を仕掛ける卑劣な所業が、セルビア兵の手で行われたことを描写することによって、戦争に対する責任をさりげなく浮き彫りにしてみせている。だが、体の下に地雷が仕掛けられている者の眼でみると、チキとニノのやりとりにうんざりしてくるのも確かである。地雷の上に横たわるなら、セルビア人だのクロアチア人だのムスリム人だのといった民族的な表象は全部吹っ飛んでしまっているからだ。

ツェラはボスニア兵として地雷の上に横たわっているのではない。一個の人間として地雷の上に横たわっているのである。このことは、やられたからやり返すチキとニノの争いはボスニア兵とセルビア兵の戦闘の構図の中に収まっているようにみえるけれども、チキもニノもそれぞれボスニア兵やセルビア兵として殺され死んでいくのではなく、チキ、ニノというそれぞれ一個の人間として殺され死んでいくことを意味していた筈だ。従って、塹壕にはボスニアやセルビアという民族的な表象からどうしても抜け切れないまなざしと、地雷の上に横たわって民族的な表象などすでに吹っ飛んでしまっているまなざしが行き交っていた。その二つのまなざしに注目すると、ノー・マンズ・ランドの中間地帯で出会ったのは、本当はボスニア兵とセルビア兵の敵同士ではなく、民族的な表象に囚われ続けているまなざしと、民族的な表象が吹っ飛んでその裂け目から露出してくる一個の人間としてのまなざしなのかもしれない。

しかしながら、チキとニノを覆っている民族的な表象のまなざしは地雷の上に横たわった者の一個の人間としてのまなざしには一向に気づこうとせず、チキとニノの争いを地雷の上に横たわって眺めるツェラのまなざしは一方的なものであったから、そこに二種類のまなざしの出会いはなかったというべきかもしれない。それでもそれらのまなざしは塹壕から抜け出すために、『ゴドーを待ち』つづけた。待ちつづけても仕方がない

と思っても、待ちつづけるより仕方がなかった。やがてボスニア兵とセルビア兵としての衝突はチキとニノを殺し合いにまでに駆り立てていき、彼らを破滅させていったが、塹壕には結局のところ国連防護軍からも、〝世界の見せ物〟のように報道しつづけるマスコミからも見放された、地雷を背に横たわるツェラ一人だけが取り残されていくのである。もはやボスニア兵でもセルビア兵でもありえない一個の人間が地雷の上に横たわりつづける姿に、タノヴィッチ監督はボスニアの今を通して世界を見詰めているにちがいなかった。塹壕の中のツェラを残してすべての者が去り、夕闇が訪れて日は暮れ、世界は暮れていく。

塹壕の中でチキとニノが互いに雄弁であったなら、ツェラはほとんど無言である。チキとニノはお互いに自分たちの憤懣を相手に投げつけようとするが、ツェラの相手は自分の背の下にあるモノいわぬ地雷であることによって、予め言葉は断念されている。ツェラの無言は、彼自身と一体化している地雷の無言から否応なしに押し寄せてくるのだ。ツェラの無言の中には、生への帰還の喜びが一瞬のうちに死への恐怖に変わってしまう不条理に対する叫びがこめられている。なるほどあらゆる生命体は生誕と同時に死に向かっているが、その死へと至るプロセスを生きようとする。そのプロセスを豊かに充実させて生きようと人は努めるけれども、目覚めた途端、死に貼り付けられているツェラには、誕生と葬式を同時に味わわなくてはならないような哀しみに直面することだけがすべてであったのだ。

映画には国連防護軍にアピールするために塹壕から出てチキとニノが裸踊りのような所作をし、その姿が懸命であればあるほど悲壮感よりも滑稽感が先に立ってしまうシーンもあるし、また戦場で新聞を手にする兵士が「ルワンダの内戦はひでえもんだぜ」と呟く苦い笑いを引き起こすシーンもみられるが、地雷の上に横たわるツェラのまなざしからすれば、すべてお伽噺（とぎばなし）に映っていたかもしれない。自身、ボスニア内戦の最前線で兵士として武器を取る代わりにカメラを手にして撮り続けたタノヴィッチ監督は、この映画で戦争に集約されていく世界のイメージを鮮烈に極限にまで引き延ばして生みだしていったが、他方、〝世界の悲惨な戦争〟に遠巻きにしながら人道的に介入しようとする国連防護軍や、特ダネの記事や絵を求めて群がり集まるマスコミの記者たちのすべて程々の振る舞いを、対極に浮かび上がらせている。

地雷の上に横たわる兵士が塹壕の中にいることを嗅ぎ付けながら、自分の目で確認すらせずに地雷を撤去したという国連防護軍の虚報を信じて、塹壕にはもう何もないと記者たちが一斉に引き揚げてしまうのは、彼らにはもはや現場に踏み込んで命懸けでニュースを掴み取ってくるという「自分の目」が失われてしまっていることを意味する。国連防護軍は一体どのような人道的援助を遂行しているのか、という疑問に駆られているテレビ局のレポーターのジェーンですらそうなのだ。それなりの正義感や人権意識を備えているようにみえる人物でも、自ら踏み込んでいく目を持たないために手前にとどまったままで、その正義感も人権意識も全く役に立たず、国連防護軍がお膳立てする中で

の行動として処理されていくのである。すべてがそうして済まされていくのだ。
　しかし、それでいいのである。戦場に命懸けで踏み込んで、ロバート・キャパのように地雷を踏んで命を吹き飛ばしてしまうなら、元も子もないではないか。国連防護軍にしても同じだ。戦争が起こる度に危険な戦場に人道的援助の名目で送り込まれ、本気で対応していたら命がいくつあっても足りない。国連防護軍にしても記者にしても、戦争のないところからやってきて、戦争のないところへ無事に帰っていくためには、戦争を目の前にしながら戦争にかかわらない態度を貫く以外にないのである。自分の身の安全を第一に考えるなら、傍観者的態度をけっして突き崩さず、テレビを囲む一家団欒(だんらん)の世界中の視聴者に同情してもらえそうな映像を次々と良心的に届けることが最大の努めなのだ。
　タノヴィッチ監督は映画のパンフのインタビューの中で、「国連防護軍のイギリス兵やフランス兵を殺した一つの榴弾は、何十人もの市民の命を奪った千の榴弾よりも百倍も重大なこととして扱われる」という「紛争が報道されるときの、テレビニュースに存在する差別」に驚いたと話したあと、西側メディアに関連してこう語る。
「サラエヴォでは、情報通信の手段がほとんどありませんでした。唯一見ることの出来たテレビ番組は、海外の紛争に関する報道を編集したものでした。この番組を見て、世界中の人々は僕たちのことを考え、生活はあちこちで中断し、戦いを終わらせるために、それぞれの指導者たちに介入を求める市民のデモが毎日行われると信じていたのです。
　サラエヴォを発った時、本当の衝撃が待っていました。人生で最も恐ろしい日でした。僕は直ちに、人々は普通に生活し、散歩をし、海辺でくつろぎ、恋愛をしていると知ったからです。バカげていると思うでしょうが、僕は本当に愕然としました……。あなたがたが普通に過ごしていることは、考えてみれば当たり前なのですが。そういう僕も現在は普通に生活しています。こうしている間にも、ロシア軍はチェチェンに侵攻し、残虐行為を繰り返していますが、僕たちはくつろいで議論しているのです。」
　すぐ目の前の塹壕では地雷の上に横たわっている一人の男がいるのに、記者の誰一人として歩いて行って自分の目で確かめずに離れ去るという光景は、そのような記者たちが送信する記事や映像を人々がくつろいで見ているという日常生活に直結していることが示唆されている。そういうこともありうるではなく、我々の世界はそういうことばかりで覆い尽くされていると考えたほうがよい。どんな殺戮行為が放映されていようとも、チャンネルを切り換えさえすればバラエティー番組が映しだされるというテレビを居間に置いて、我々は快適な生活を過ごそうと努めているのである。だが、９．１１同時中枢テロはどんなに理不尽であったとしても、そのような我々の生活とつながっているニューヨークを直撃した筈だ。あらゆる傍観者的な態度もまた、その傍観故の報復を被らざるをえなくなることを、自分たちの最も身近な塹壕の中で地雷の上に横たわっている者のまなざしは訴えつづけているのではないか。　　２００２年７月２１日記